

164

649

高の師直 太平記忠臣講譯 脚本 上の巻

伊賀越道中雙六 脚本 上の巻

妹脊山女庭訓脚本 上の巻 合本

○一の谷嫩記軍脚本 上の巻

日高川入相花王脚本 上の巻

088644-000-7

特52-597

太平記忠臣講釈・伊賀越道中雙六・妹脊山女庭・  
一の谷嫩軍記・日高川入相花王 上の巻

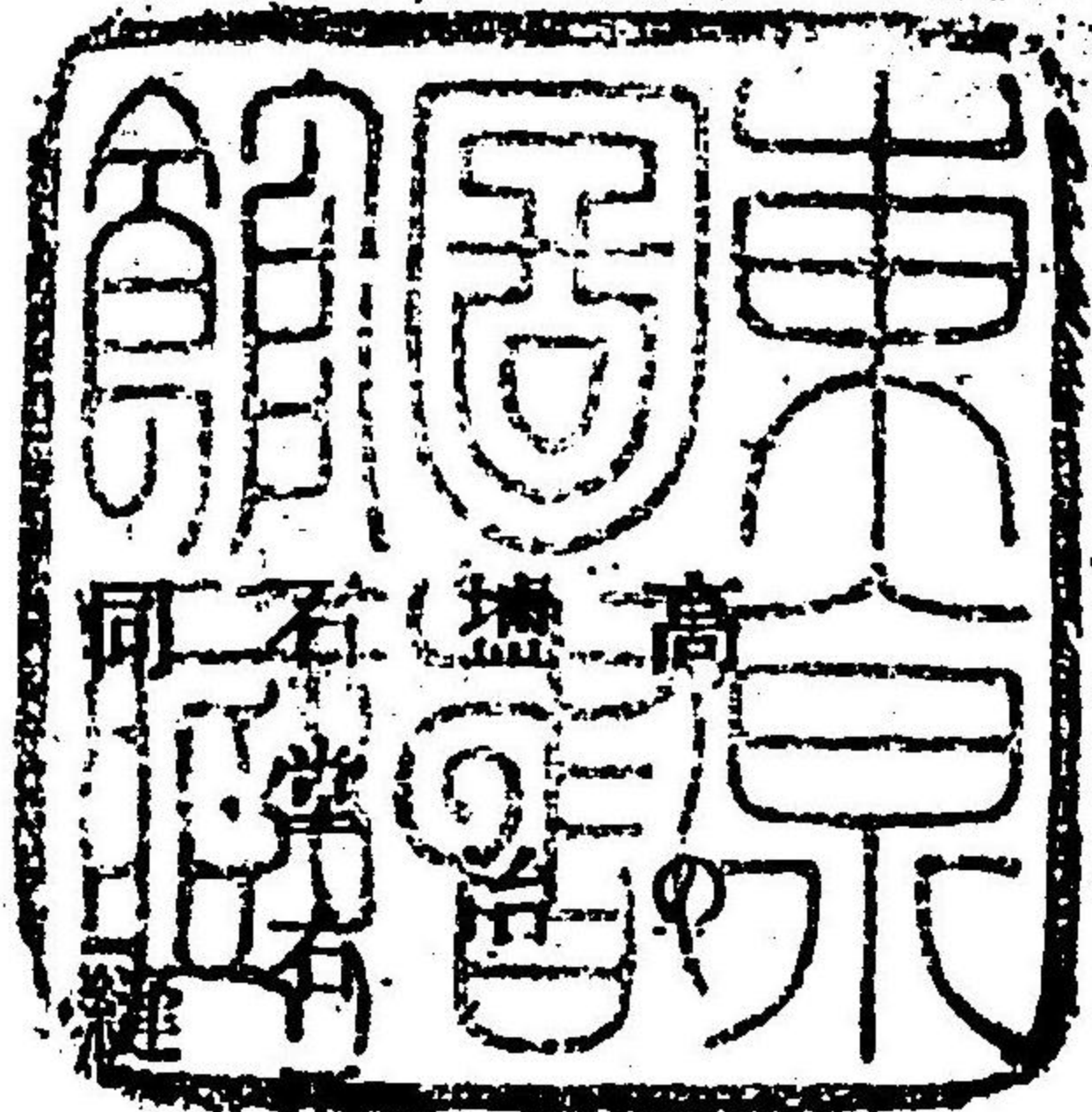
岡野 美春／補綴

M27

DBJ-0303



高直の御鑑 太平記忠臣講譯却本 上の巻



師	近	松	半	二	原	著
判	岡	野	美	春	補	綴
官	矢	間	十	大	郎	
大	星	力	彌			
藥	師	寺	治	郎	左	衛
門						
之	之					
助	之					
	諸	士	大	勢		
	家	來	大	勢		

本舞臺一面平舞臺通て高塚の張物總て鎌倉御所横面の体幕の内より河野の家來一人臺に載せたる金色の巻絹を下部に持たせ立居る此之人よしらく時の太鼓にて幕あく

○「今打しは六つの太鼓武藏の守にも最早御登城暫らくこゝにて待申せん

ト向ふより桃井の家來下部に金色の巻絹を載せある釣臺を昇かせ出來り

□「それにゐるは河野殿の御家來てゝゝらぬ

○「そういふ貴殿は桃井殿の

□「御内てゐる見申せば數多の巻絹察する處武藏守殿への御進物か

○「如何にも左右てゐる

□「ナント日々此通り諸方よりの御進物

○「身共等も賣て半日師直公にありゐるわらは

□「お暇いたゝ今流行る

○「アイスクリムでも

□「致し申て

○「アハ、ハ、ハ、ト向ふより藥師寺治郎右衛門續いて高の師直は乗物にて

供人を連れ出て來きはみなくは平伏す

藥「其方達は武藏守殿の御目見へ願ひか

□「左様てゝり升る

□「然らば武藏守殿にも途中の目見へ苦しかるまじイヤ御對面をさまよ

師直の乗物を昇据へ引戸を明る

□「そら達はゝづきの家來じや

□「ハ、某は桃井播摩守の家來

○「河野大炊之助の家來てゝり升る

□「主人播摩の守儀今度饗應司の役目につき委細御傳授に預り大慶さまに過す寸

志の御禮輕少ながら黄金百枚并に巻絹

○「拙者の主人大炊之助よりも黄金五十枚巻絹少々御受納下されまば

○「ありがたう存じ升る

師「コレハ、夜前といひ今日申町噂の御禮此上なから随分とれ差圖申さふ後

刻營中にて貴意を得んと傳へてくりやまその進物は苦勞ながら直に身の尾敷

へ持參仕やれ

○「ハ、ア

師「大儀く、ト悦ふこゝし兩人は下手へ這入る

師「ナント藥師寺殿御らふしたか此度の勅使設け太切の規式格式を存知たは此師

直たつた一人指圖を受る禮としてそれくの心付けイヤモかうなふては叶はぬ管夫に何ぞや第一の役人鹽谷判官こやつ大の馬鹿者其くせ吝者ど見へて是程の大事を頼むに桑酒干香様の送り物師直を踏付けた仕方

藥師 「成程左様じさいさや花が日比より仁義立てが氣にくはぬ殿中にて大耻か、せ重ての見せしめになされ

藥師 「ナ、そあつぬからぬ夫故に何事も傳授致さぬ

藥師 「ヤア、ソくあれへ来るは鹽谷判官

藥師 「其元は先登城萬事は後程

藥師 「然らばお先へ

持せ出来る

ト上手へ這入る向ふより鹽谷判官矢間十太郎に菓子折を

高の直 太平記忠臣講譯却本 上の巻終

伊賀越道中雙六

故近松半二原作

岡野美春補綴

百姓平作

商人重兵衛

娘お米

古道具屋市兵衛

重兵衛供安兵衛

平舞臺下手草家造り名物白酒の看板立長に掛け傍に沼津驛と書たる棒を立稻村造り  
 平舞臺の正面海上和船通行の体能く見せ上下両手正面迄波木の林上手は波木より高  
 く富士山見せ随分古の東街道と見体宜く仕組重兵衛供の安兵衛ハ荷物しやんと旅調  
 へ花道より舞臺係り立場と見かけ立どまり

重 「コレハしたり大事の用を吃んと忘れた大義をがらとしが寄た所迄一走り往て  
 きてたも

平安 「へい〜 トもと来し道へ引返そ「平作稻村がけより

「且那中お泊迄参りませうかや且那様どうぞ持して下されませ今朝からまた一  
 文も錢の顔を見ませぬどふぞお慈悲に

重 「イヤイヤわしの今夜は夜越え行  
 重 「サそこがね慈悲で座り升

重 「サそんなら吉原まで何はうじや

重 「エ、おまへ様もわたし頼んで持のじやものそゝあ程に下さりませ

平 「サそんならやらしやれ年寄のよしにせいでの「平そんならアノ持して下され  
 升のチエ、忝ないサアお出ささりませヤット任  
 平 「且那今日のけこうな天気じやあヤット任せ

平 「且那中し向ふの立場に餘の名物がござり升ヤット任せ

重 「ア、コレ親仁どんちつと持てやりませうのア、それ〜危ない〜

重 「イエ〜勿体ない〜

重 「ア、氣の毒も足元最前から見て居るに氣しんどうであらぬわい

重 「へーこれはそまの足のくせであ座り升且那のおかげで今日も内入がよござり  
 升

重 「モウこあたもいくつじや  
 重 「へいモウ七十に手が届いて座り升

重 「ア、ソレ〜合点の行ぬ足取じや  
 重 「イヤ〜お氣遣なさは升な若い時又は小角力が一番もとりませた ヤット任  
 せ ト(此時平作ハ木の根につまきひてひろ〜)

重 「ソレ見やしやれエ、さつじ事をしたの親指を蹴りいたかヨシ〜早速に直し  
 てやろうト(重ハ用意の薬を取出して保護の体)

重 「何ントどうじやいたみは止らうがな  
 重 「コレハ〜結構な薬で座り升痛は頓と直り升たサア〜ね出さされませ  
 重 「イヤコレ〜荷はおれが持てやる

平 「旦那様めつてうさ

重 「イヤサ駄賃はやる氣遣ひさしやんなこちの足元最前あらあふなふてく荷  
を持た方がやつと氣樂な嘶しもつて行ましやうサアくござれ

平 「ア旦那様一肩やりませうあ

重 「イヤく是で大分歩行よいア、あなた足元茶めいた物じやの其足取を狂言  
師に見せた心のふ乱れなど、云ふて授傳事に成そふさ

平 「へ旦那様のねしやる通り大概乱れか、つており升のいハハ、ト云

重 「ひささ平作の内に入りか、ると娘お米が顔見合せ」

平 「アヤと、様か

重 「ふよねじやあいか今日の結構を旦那様の供したので荷は持たせにお世話に成  
たれ説やてさ

平 「コレハく有がたいとふ愛が私の内暫くれ休み遊をしませ

重 「かあけなさりや庭一のいいに座敷へマアお上り

平 「マアお茶一折悪う湯もをるそ水でなりとおみわしを

重 「ア、イヤくもふ行升る扱娘御はよい器量ふし附なから此内はセ、ナク  
咲いた杜若よい床へ生さいのふ

平 「ハイとなたを左様にかつしやり升自慢で作つて置きましたれと近頃は手入が

悪さにいさう田地かわれ升も何が身に構はせ賃仕業貧乏は苦にもせを夫を  
ハく孝行にして呉れ升それで私が年寄りの雲助もせめて三文など肩やす光  
とあまれあれがいじらしさで座り升

重 「コレと、様始めてのお方に其様なさむしい嘶を

平 「ア、ホンニそうであはねハ、ハ、ハ、イヤお米今日はれふきな怪我を仕てな  
レく是れ見上爪が起てある、レテ薬もあれば有物じやあいら、あま様の薬  
きついで妙薬ア旦那様ありや何ぞやね薬で座り升

重 「此薬も大切かい物で第一金瘡に其傷で治る大妙薬武家方には尋ねれとも金  
錢ぞくでは手に入らぬ云妙薬

平 「ソレハく、様の命の親一日や二日でお禮は云も尽されをるふ事なら今  
香の爰に滞留遊ばせて

重 「ア、コレ娘何云ウぞいこんな内にね泊りやして着は千筋か一疋あし風よ  
う外にあまたの身には什物ない

妹脊山女庭訓脚本 上の巻

故近松半二原作

岡野美春補綴

鎌足大臣 蘇我蝦夷子

後室さだか 宮城玄蕃

大判事清澄 荒卷彌藤次

采女の局 中納言行主

嫡子久我之助 群臣大勢

雛なとり姫 娘小菊

好桔梗 百姓二人





おれはもし取次して叶はぬ時私の意趣により依怙の沙汰致したと疑われ  
は詮がないソレ玄蕃取次られよ

玄 「ナ、是幸ひイヤさたる願兼て主人蝦夷子公に御願ひ申貴方の息女雛鳥殿某か

宿の妻に申受度いろくと申せども今に何のさたもあし只今の御詞で拙者も

安堵致したぞい ト嬉ふこそしさたかは返事もせせうつむいて居る

行 「ヤアくさたる玄蕃か願は内意の事何々の内奏問をとけ家名相續の沙汰あら

賃 「ハ、有かどふ存し升 ト向ふへ道入る

○一の谷嫩軍記 脚本

故近松半二原作

岡野美春補綴

熊谷次郎直實

女房相摸

御臺所藤の局

軍次

本舞臺中足四間の二重舞臺上手一間塗障子屋体次ハ一面稻妻形襖總で熊谷軍家の体  
此之人よろしく時の太鼓にて暮あく

熊 ○サア早くいなくハテ何を猶豫する

△上

熊 ○コリヤ女房其方は愛へ何しに來た國元出立の節陣中へは便ても無用と堅く  
云付置たるに詞を背くと云ひ刺すへ女の身で陣中へ來る事不屈至極の女光

△上

相 ○其れ叱りを存じながらとふかかうかや案じるは小次郎が初陣故一里いたら  
様子おしれか五里いたら便りがあるのと七里歩十里歩百里餘りの道をついで  
迄ホ、ホ、イサ、まんま登つて聞ば一の谷とやらで今合戦の最中と取々の傳  
故子に引をさるは親の因果御了簡下をせませマア此小次郎は息災で居ゆすか

△上

熊 ○戰場へ赴くからは命はなき物堅固を尋る未練な性根若し討死したら何とす  
る

相 ○イゝゑいゑ小次郎が初陣によき大將と引組で討死でも致えたら嬉しい事  
でござんしよ

△上

熊 ○ホ、先小次郎が手柄と云は平山の武者所と争ひ援がけの高名軍門よかけ入  
ての働き手傷少々負たれ共未代迄家の譽き

相 ○エ、して其手疵は急所ではござりませぬか

熊 ○ソレまた手疵は悔ひ顔付若し急所から悲まいか

相 ○イエ何のいなかすり疵でも負程の働きは出かしたと思ふて嬉まの餘りお  
尋其時お前も小次郎と一所にお出さされたか

熊 ○ホウ危ふしと見るより軍門にかけ入り小次郎をむりに引立小脇にひん抱我  
陣屋へ連歸り某は其軍に搦手の大將無官の太夫教盛の首取たり

△上

御 ○我子の敵熊谷やらぬ

△上

熊 ○敵呼はり何やつ

△上

相 ○ア、これく聊爾なされなあきたの藤はお局様  
△上

熊 ○ハア思ひがけあるを對面

△上

御 ○コリヤ熊谷軍のならんとはいひながら年はも行ぬ若武者をよふむごたらし  
う首討ナアサア約束じや相摸助刀して夫を討せ何とく

相 ○アイはいく

△上

相 ○エ、これ直實殿致盛様と院のお胤と知事からどふ心得て討ーやんした様子  
が有ふ其譯を

△上

熊 ○ア、ねろかく此度の戦ひ敵と目ざすは安徳天皇それに従ふ平家の一門致  
盛はさて置誰彼と鏢を削るゝ用捨があるか イヤ藤の方戰場の義は是非  
あしと此語下せるべし其日軍の有増と致盛卿を討たる次第物語らん

△上

熊 ○扱も去る六日の早東雲と明る頃一二を争ひ抜がけの平山熊谷討取れと切て  
出たる平家の軍勢中に一際勝れし緋威さしもの平山あしらひ兼濱邊をさして  
逃出すハテ健氣なる若武者逃る敵は目あかけせ熊谷是にひかへたり返せ戻せ

△上

相 ○ヤアく何と其若武者を組敷てか

熊 ○されは此顔をよく見奉ればかね黒々と細眉に年はいざよふ我子の年はい定  
めて二親ましますさん其歎はいか計り子を持たる身の思ひの餘り上帯取て引立  
塵打拂ひ早落給へ

相 ○す、先さしやん一たかそんなら討奉るれ心ではあかたの

熊 ○早落給へとす、むれとイヤ一旦敵に組しかれ 面目にながらへん早首取よ  
熊谷

日高川入相花王脚本 上の巻

故近松半二原作

岡野美春補綴

櫻木 磨 女房おもと

奥方眞弓 馬士八藏

蘭 監物 鬼の丸八

養子大作 駕昇二人

百姓與二兵衛 家來大勢

本舞臺通り中高の棕櫚伏の土堤中央に古ひたる辻堂軒先に馬頭觀音の額苔むしたる  
狐格子出這入り上下藪疊の空より松の釣枝後ろ黒幕總て狼谷の体鐸鈴馬士唄にて  
幕わく〇直く向ふより馬に金箱を負せ出來り花道にて

八 「はてつ腹め歩きおれ  
ト酒よ酔ふたるこそしにて馬を引き舞臺へ行戸屋  
の内より

九 「チ、イ〜 ト聲かけ目斗頭巾長脇差にて出來り

九 「馬がかはつたい待わがれ

八 「エ、急ふ荷物て大津迄の早追餘の馬かつたあらぬ〜

九 「ム、あらざ置て行け

八 「何を

九 「ハテ酒價をこのういふ形てかういふからぞ知れたこつちや

八 「ムウて〜つはごましやあ〜コリヤ目を明いて働けやいそん事事はがつて

九 此海道を夜るよある通らる、物かい出をせ〜

八 「チ、さかてかいやあら首おいていけ

八 「イヤこいつか〜馬士の首取がはやる逆そんやあいぞよ 喰の八と  
いふては恐らく此街道ではいらはしらぬかまら爺とも誰もまらぬものもあ

九 男じや追剣の一人や二人相手にする男じやのい命かおしくはちやつ〜ど遊  
い ト胸をた、いて強い顔する

八 「へ、やりかつたはコリヤやいおいらを誰じやと思ふ馬士ても侍ても目にか、  
つたらのがさぬ鬼の丸八じやさのふも一疋馬士めを殺し谷へ蹴込て置たをし  
らぬか

八 「エ、 トびねくりして跡しざりしがタ〜ふるふこなし

八 「どねこいこ、しや ト膝踏しめる

八 「何しやい〜そんなおどしくふ男じやないおまやちつともおはふはないがは  
いらはおれがこはふはあいか

九 「ヤイたはけめ一人二人の小盜せぬ大金を引さらへるのしや常の旅人に目はか  
るぬはいらか様奇馬士か好しやはい

八 「エ、イ悪るものか好しや奇馬追船頭おちの人は人の嫌ふものしやが其中のか  
れが追剣に好れたどるふのコリヤ百年めしやモッ少、の酒價は進せう

九 「いやじやはいおるらが酒價は馬に付た此金箱 ト手をかくる

九 「ドッコイそれ取られては トまがみ付を丸八ははふり投る  
ト立か、れは八藏

は泣出し

八 「ア、お金は上ます鬼様とやらぐはん様とやら最前いふたは皆鉄砲まつひらかゆるし下さりませ

九 「サ、金さへ渡せは思案がある

八 「左様ならばあなたのおやうな結構な御商賣のお弟子にして下されませかういやはらふくやうなれと御商賣体には私も器用はた博 は好あり酒はすき密夫もすりや小盗もする におやりなされふから見事 もつき升る夜は押入家尻切 晝は小盗巾着切どんち事でも致し升せう命斗はどうぞお助者コレ鬼様剣様拜み升る ト泣く

九 「エ、殺すにも柏子のあいやつ馬めと一所に隙をやれ ト手綱よぐるくと並木にまぼり付る

明治廿七年五月十五日印刷  
全 廿七年五月十九日發行

(定價八錢)

大阪府西成郡曾根崎村番外拾八番屋敷

著作者 岡野美春  
兼發行者

大阪市西區江戸堀南通四丁目五番屋敷

發行者 植木嘉七

大阪市北區堂島裏壹丁目百拾八番屋敷

印刷者 三盛堂 鈴木千代三



